

「平庭の麓から」

文責：久慈市立山形小学校 校長 角谷 隆章

学校+保護者+地域=子どもの健やかな成長

「学び高め合う子」、「心豊かな子」、

「強くたくましい子」の育成をめざして

【“できの悪い子”、“よくできた子”】

大人の間で「できのいい子だ」、「よくできた子だ」、「本当、できの悪い子だ」、「何でこんなにできの悪い子に育ったのかねえ」などという声を耳にすることがごくまれにあります。この『できの良い・悪い』は果たして、何を指しているのでしょうか？ 学業成績（テストの点数）、言葉遣い、あいさつ、困っている人を助ける行為、弱い者をいじめる行為、服装、整理整頓、人付き合い、表情（笑顔・怒った顔）……、いろいろな場面が想定されます。もしかしたら、一つではなく、複数の事柄を指している場合があるのかもしれませんが。

例えば、あいさつをしても、不愛想で、服装もだらしのない子どもがいたとします。しかも成績もあまりよくない。そこで大人は「あの子は、ずいぶんできが悪い子だねえ」という印象を持つわけですが、これは無意識のうち、一つの“レッテル”を貼ることにつながっていると私は考えます。その子には何かしらの事情があるのかもしれませんが。また、困っている人を助けたり、家の手伝いをしたり、よくできているところがあるのかもしれませんが。そこを深く探るわけでもなく、見た目で「できの悪い子」と決めつける。逆を考えてみてください。あいさつはさわやか、成績も上位。大人は見た目で「できのいい子」という印象をもちます。でも、大人が見ていないところではいじめのボスだった……。どうでしょう。そうすると、見方が180度変わることになるのではないのでしょうか。

何を言いたいのかというと、見た目の印象で“～な子”という見方はしない方がいいということです。^じ十把一絡げにして決めつけないことです。「この子は、～ができる（ようになった）。よく頑張ったね」、「この子は、～ができていないから、できるように教えよう」という見方を持つようにすべきだということです。

子どもに限らず、人間には様々な側面があります。誰一人、一括りで語るができるような人はいません。特に、子どもの可能性を広げたり、伸ばしたりするためには、大人の正しい支えが必要不可欠です。

親はもちろん、教師、地域…、その子どもに関わるすべての大人が、一人ひとりを様々な角度からみて、一つ一つ丁寧に指導したり、教えたりしたいものです。決して一括りにしてレッテルを貼らないこと。山形小学校の子どもたちが、総じて、素直で健やかに成長してきているのは、周囲の大人が正しく支え続けているからだとは強く感じています。これからも、子どもたちに対して、温かい目を、そして、正しい教えを。どうぞよろしく願います。【校長の私見ですが、運動会前、教職員に伝えたことをもとに書きました。】

【見て！ 見て！ お母さん！】

夏目漱石は「I Love you」を「月がきれいですね」と訳したそうです。そう、大好きなあなたと一緒だから……。粹ですね、漱石。

作家の伊集院静さん。真夜中に執筆をしていると、飼い犬がうるさく吠えて集中できない。しかたなく犬を連れて庭へ出る。見ると、雨の中で、めったに見られないムクゲの花が美しく開いている。犬に文句ではなくお礼を言う。「お前が吠えなきゃ、見逃すところだった。ありがとうよ」

さて、今夜は「感動の共有」についてのお話。「異性と仲良くなる方法は、たとえば一緒につり橋を渡るようなハラハラドキドキ体験をすること」だと、よく言われますね。この効果は「つり橋効果」などと呼ばれています。だから、好きになってもらいたい相手がいたら、2人で映画などへ行って、一緒にハラハラしたり感動して泣いたりするのがいい。まあ、「一緒に映画に行けるほど親しかったら世話ないじゃん」というイチャモンはとりあえず横に置くとして、これこそ「感動の共有」の効果ですね。

街角で、小さな子が「見て見て お母さん！」って言っていることがあります。3歳くらいの子にとっては、見るモノ、聴くモノ、すべてが生まれて初めてだったりするので、そりゃーも一世の中は驚きに満ちているわけです。たとえば、3歳の子が、ご主人と散歩している犬が服を着ているのを生まれて初めて見たとしたら…

その子にとっては、「世紀の大発見」です。「こっ、これはお母さんに報告しなければ！」そう思って、大声で「見て！ 見て！ お母さん！」と繰り返します。でも、井戸端会議のおしゃべりに夢中なお母さんはまったく相手にしてくれない。そうこうしているうちに犬はどんどん行ってしまいますから、いよいよ男の子のボルテージは上がります。「お母さん！ ほら！ ほら！」と、もう絶叫している。するとお母さんに「うるさいわね、静かにしなさい！」と一喝されて、とうとう泣き出してしまいます。実際に、これに似た場面を私は何度も目撃しています。そのたびに「あら、ホントに可愛い犬ね。ピンクの服なんか着ちゃって」と反応してあげればいいのに……と他人事ながら思ってしまいます。この親の反応の違いが、子どもの将来を変えるような気がしてなりません。

さて、この「感動を共有してあげるかどうか」は、子どもに限った話ではありません。例えば職場で誰かが初めてハワイへ行った話をはじめた時。何度もハワイへ行っている人は、つい話を真剣に聞いてあげなかったり、「あっ、あそこね」と話の腰を折ったりしてしまうもの。そこをぐっと我慢して、「へー、すごいねえ」と興味深げに聞いてあげる。行ったことを隠す必要はないけれど、「私が行ったときは雨だったよ。晴れていてよかったねえ」と感動を分かち合ってあげる。そんな些細なことをできる人が、男女を問わずに「モテる人」なのだと思います。仲良くなりたい人がいたら、この「感動の共有」を意識してみてくださいね。

「夜、眠る前に読むと心が『ほっ』とする50の物語」第32夜 著：西沢泰夫 三笠書房 より

【大人、子どもに限らず、人とどう接するのが良いのか、振り返るきっかけになると思い、紹介しました】

上記2つはいずれも、子どもとどう接するかのヒントになると思います。親が子どもをどうみてあげるか、親が子どもとどう接してあげるか。私も改めて自分事として考えてみたいと思います。ついでにもう一つ…。

【平等と公平の違いは何でしょう？】

実はこの二つ、似て非なる言葉、大きな違いがあるのです。平等は、「扱いが同じである」、つまり「何の扱い」を同じにするかということです。公平は、公（おおやけ）にみて「扱いが平ら」である必要があります。公平が担保されて平等が推進されるのです。つまり、スタート地点を一致させることが公平であり、ここをクリアできてこそはじめて平等が実現されるのです。さて、様々な状況の子どもがいっしょに生活をしている学校では、平等一辺倒でいくと、歪みがでるのは明らかです。教職員に伝えたことですが、各家庭での教育や躾しつけにもあてはまるのではないのでしょうか。

